

思春期・若年成人（AYA）世代がん患者に対する包括ケア提供体制の構築に関する研究」班分担研究
AYA 支援チームのモデル作成に関する研究
研究分担者 磯山 恵一 昭和大学病院小児科 特任教授

研究要旨：AYA 世代がん患者の個別ニーズに対する支援体制を構築することを目的とする。これまでの AYA 世代小児がん診療の問題点を踏まえ、AYA 世代がん支援チームを立ち上げた。本年度の AYA 支援チームの目標を、AYA 世代がん症例の随時把握方法決定、支援方法の問題点の把握と改善とした。チームメンバーとして AYA 世代がんの頻度が高い診療科の医師を加えた。AYA 世代症例を随時把握し、迅速にニーズを把握するためには、がん診療に関わる部門の職員が、AYA 世代の問題点を周知しておく必要があると考えた。

A. 研究目的

昭和大学藤が丘病院は、附属 8 病院の一つで、横浜市北部地域・東京南部の地域医療を担う高度急性期病院である。2017 年横浜市小児がん連携病院の指定を受けるとともに、小児・AYA がんセンター（以下、センター）を組織し周辺地区からの AYA 世代小児がんを受け入れてきた。

思春期・若年成人（AYA）世代のがん患者が、疾病に罹患したことによって抱えるニーズは多様である。就学、就職、生殖機能の温存などの個別のニーズに対して、病院として職域を超えた全人的なケアが行き届くようコーディネートができるよう支援体制（AYA 支援チーム）を構築することを目的とする。

B. 研究方法

AYA 世代がん支援チームの設置：昭和大学藤が丘病院の小児・AYA 世代がんセンター運営委員会を以て、AYA 世代がん支援チーム（以下、支援チーム）を立ち上げについて検討した。その上で、新規 AYA 世代がん患者の随時把握の方法について検討した。

AYA 世代小児がん患者のニーズと問題点の確認：2017 年 4 月からセンターで入院治療を行った就学中の患者の妊孕性温存と就学支援について、入院時または診断時に担当医師と看護師が確認した。

倫理面に対する配慮：本研究は、院内の診療体制を新たに構築する研究であり、個人情報に関

する配慮は、昭和大学藤が丘病院の倫理規定に則り行った。

C. 研究結果

支援チームと構成メンバー：2018 年 8 月に支援チームを立ち上げた。支援チームの構成は、既存のセンター運営委員会構成員（小児がん腫瘍専門医、小児内科医、緩和ケア・腫瘍内科医、血液内科医、看護師、薬剤師、ケースワーカー、事務職担当者）に乳腺外科医を加えたメンバーとした。支援チームの責任者は、センター長が兼務することとした。

AYA 世代がん患者の随時把握方法：AYA 世代がん患者が入院した際、各病棟看護師長または係長が随時ケースワーカーへ連絡する。ケースワーカーからセンター長へ報告することで入院患者の随時把握が可能となる。

AYA 世代がん患者のアンメットニーズの把握方法：現状で問題となる点についてアンケート用紙を配布し個々のアンメットニーズを把握し、実際に対応にあたる。今後、毎年度末に人数や個々のアンメットニーズの集計、実際の対応状況について検討する。

AYA 世代小児がん患者の教育支援について：2017 年 4 月から 2018 年 12 月までに昭和大学藤が丘病院小児・AYA 世代がんセンターで入院加療を行った患者 12 例全例が教育支援を希望した。そのうち、在籍校から教師派遣が行われたのは 2 名のみであった。これらは学校側の都合により

不定期であった。実施場所も、ベットサイド、会議室など一定の場所を提供できなかった。

妊孕性温存については外部医療機を紹介し全例が受診、そのうち男性2名が精子保存を行った。

D. 考察

AYA世代のがん患者が、疾病に罹患したことによって抱えるニーズは多様である。従って、就学、就職、生殖機能の温存など、個別のニーズに対して、職域を超えた支援体制が必要である。本年度の研究では、支援チームの立ち上げ、新規の患者の随時把握方法決定を行った。また、既存の小児・AYAがんセンターでの患者支援の問題点の抽出を行った。

支援チーム立ち上げについては、センター運営委員会で、小児がん以外のAYA世代がん患者さんへの支援が必要であることを説明し理解を得ることができた。センターは、小児がんのAYA世代を対象にしていた為、支援するチームには、乳腺外科医を委員として向かい入れた。AYA世代がん患者の随時把握方法は、各病棟の看護師長が行うため、現場の看護師への一層の啓蒙が必要であると考えられる。

患者ニーズのうち、就学支援と妊孕性温存については、治療開始までの間に担当医師・看護師が説明を行い、全例が両者とも希望していた。当院では、精子や卵子保存は行っていないが、近隣の施設を紹介することで対応することが可能であった。一方で、教育支援に対しては、学校、病院が個別に行えることは限度がある。本研究の成果を踏まえ、国の施策として、学校、病院それぞれが体制を整えることができるようにすることが必要であろう。我々のセンターに入院した患者のニーズ把握は、小児科医と看護師が行うことで対応が可能であったため、ケースワーカーや事務職の介入が少なかった。今後、症例の随時把握が行われた場合には、既存の院内総合相談センターと支援チームが連携し、AYA世代がん患者への多様なニーズに迅速に対応可能となると考える。

今後の方向：地域のすべてのAYA世代のがん患者が、疾病の管理を行いながら、満足度の高い生活を送るために必要な体制を構築することが重要である。

E. 結論

AYA世代症例を随時把握し、迅速にニーズを把握するためには、がん診療に関わる部門の職員が、AYA世代の問題点を周知しておく必要があると考えた。

F. 健康危険情報

なし。

G. 研究発表

1. 論文発表

山本 将平, 外山 大輔, 杉下 友美子, 金子 綾太, 岡本 奈央子, 小金澤 征也, 藤田 祥央, 秋山 康介, 松野 良介, 磯山 恵一. 昭和大学藤が丘病院における小児・AYA世代がん設置の取り組み. 昭和学術誌 2018;78:513-519.

2. 学会発表

松野 良介, 外山 大輔, 青木 真史, 石井 瑤子, 上條 香織, 秋山 康介, 山本 将平, 磯山 恵一. 寛解導入療法中に上矢状静脈血栓症を合併したAYA世代急性リンパ性白血病, 第40回血栓止血学会学術集会 2018.6.28 札幌

松野 良介, 外山 大輔, 江畑 晶夫, 服部 透也, 金子 綾太, 岡本 奈央子, 秋山 康介, 磯山 恵一, 池田 裕一, 山本 将平. 頭蓋内静脈洞血栓症を合併したAYA世代急性リンパ性白血病. 第60回日本小児血液・がん学会学術集会 2018.11.14 京都

服部 透也, 松野 良介, 江畑 晶夫, 金子 綾太, 岡本 奈央子, 秋山 康介, 外山 大輔, 磯山 恵一, 池田 裕一, 山本 将平. 初診時化膿性筋炎を合併したAYA世代急性骨髄性白血病の1例. 第60回日本小児血液・がん学会学術集会 2018.11.14 京都

F. 知的財産権の出願・登録状況

なし。